

## 高校生が学級担任に求める会話と共有活動の内容

井村亘<sup>\*1,2</sup> 難波知子<sup>\*3</sup>

## 要約

高校生の時期は、心身ともに発育発達途上であり、自己の将来に向けた葛藤が生じやすいことから、精神保健を目的とした「援助」が不可欠である。学級担任（以降、担任）は、学業、生活面に多くのかかわりもつため、ソーシャルサポートを提供する援助者として重要な存在である。そこで、本研究は、高校生が担任に求める共通性の高い日常的な会話内容と共有活動内容を明らかとし、担任に対するサポート期待の向上に資する知見を得ることを目的に調査を実施した。本調査では、予備調査で生成された「会話内容」の18項目、「共有活動内容」の8項目に対する意志の程度を問うた。その結果、意志の程度が有意に多かった「会話内容」の10項目、「共有活動内容」の2項目が、高校生が担任に求める項目として選定された。

## 1. 緒言

高校生の時期は、Eriksonの発達段階の青年期（13～18歳）に当たりアイデンティティ確立の発達課題と混乱を抱えている<sup>1)</sup>。発育面では、生殖器系の発育が著しく性ホルモンによる男女差が明確となり、身長の伸長は止まる<sup>2)</sup>。令和4年3月末における、高校生の卒業状況調査では、大学進学率が59.4%、専修学校（専門課程）進学率が16.8%、就職率は14.7%であり<sup>3)</sup>、将来の方向性を見極める必要に迫られるため、焦りや不安を感じやすく、総じて、心身共に不安定なことを特徴としている。また、文部科学省の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」<sup>4)</sup>では、精神疾患が増えている状況が顕著になってきており、一次予防、二次予防の観点からも、精神保健を目的とした高校生に対する「援助」は不可欠である。

さて、精神保健的「援助」を考える枠組みをソーシャルサポート（家族や友人、職場、地域社会などの人間関係を通じて行われる社会的支援）として捉え、その現象理解や効用に関する研究が蓄積されてきた<sup>5)</sup>。ソーシャルサポートの授受には、「サポート受容者（以降、受容者）とサポート提供者（以降、提供者）」が存在し、サポートの側面には、「実行さ

れたサポート」と「期待されたサポート<sup>†1)</sup>」がある<sup>6)</sup>。実行されたサポートとは、実際に受けたサポートの経験であり<sup>6)</sup>、期待されたサポートとは、困った時にはサポートしてくれるであろうというサポートの利用可能性についての認知である<sup>6)</sup>。精神的健康の増進に対しては、実行されたサポートよりも期待されたサポート（以下：サポート期待）の方が重要であるとされており<sup>7)</sup>、高校生の精神的問題に対して教師に抱くサポート期待が好影響を与えることの報告もなされている<sup>8-11)</sup>。特に、学級担任（以降、担任）は、高校生が生活時間の大半を過ごす学校という社会で、最も近くに居合わせながら、学業、生活面に多くのかかわりをもつ存在であり、提供者として重要であると考えられる。しかし、高校生が提供者として認識している他者は、友人や家族である<sup>12)</sup>ことや、精神的不調については担任には相談しにくいと認識している者が多い<sup>13)</sup>ことから、高校生の担任に対するサポート期待は大きくないことが窺える。

サポート期待に影響を与える大きな要因に受容者と提供者の関係性があり<sup>14)</sup>、その関係性は、受容者の特性、提供者の特性、受容者と提供者の社会的相互作用の3つの要素によって構成されていると考えられている<sup>14)</sup>。その3つの要素の中でも、受容者と

\*1 川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 健康科学専攻 博士後期課程

\*2 玉野総合医療専門学校 作業療法学科

\*3 川崎医療福祉大学 医療技術学部 健康体育学科

（連絡先）井村亘 〒706-0002 岡山県玉野市築港1-1-20 玉野総合医療専門学校

E-mail: imura@tamasen.ac.jp

提供者の社会的相互作用が受容者と提供者の関係性を構成する最も大きな要素であることが明らかとなっている<sup>14)</sup>。現在、高校生の教師に対するサポート期待に影響を与える要因として、性別<sup>8,10,11,15)</sup>、年齢<sup>8,10)</sup>、教師に対する信頼感<sup>16)</sup>、学校への帰属意識<sup>17)</sup>などが検討されているものの、高校生と担任の社会的相互作用に対する検討はなされていない。

ソーシャルサポート理論の中でも受容者と提供者の社会的相互作用に重きを置いた理論に Relational Regulation Theory<sup>14)</sup> (以下: RRT) がある。RRT では、社会的相互作用の特に受容者と提供者間の日常的な「会話」と一緒に行う活動である「共有活動」の質を、サポート期待や精神的健康を規定する大きな要因として位置付けている<sup>14)</sup>。実際に大学生、海兵隊員などを対象として日常的な「会話」や「共有活動」の質がサポート期待や精神的健康に影響を与えることが明らかとなっており<sup>14,18-20)</sup>、高校生と担任の関係においても日常的な「会話」や「共有活動」の質は重要であることが推察できる。特に多数の生徒と関わる必要がある担任において、高校生全体に共通性の高い担任に求める日常的な「会話内容」と「共有活動内容」の知見は、生徒の担任に対するサポート期待、精神的健康の向上に向けた汎用性の高い生徒へのかかわり方への示唆に繋がると思料する。

そこで、本研究は高校生が担任に求める共通性の高い日常的な「会話内容」と「共有活動内容」を明らかとすることを目的として予備調査と本調査を実施した。具体的には予備調査にて高校生が担任に求める日常的な「会話内容」と「共有活動内容」の項目プールを作成し、本調査にてその項目プールから共通性の高い項目を選定した。

## 2. 用語の定義

本研究における「会話内容」と「共有活動内容」は、授業時間を除いた、休憩時間、放課後等の学校生活において担任に求める内容とした。

## 3. 予備調査

### 3.1 目的

予備調査の目的は、高校生が担任に求める日常的な「会話内容」と「共有活動内容」の項目プールを作成することである。

### 3.2 方法

#### 3.2.1 研究デザイン

本研究デザインは、横断的な自記式の質問紙を用いた質的記述的研究とした。

#### 3.2.2 調査対象

調査対象は、機縁法によって調査協力が得られた、

A 県内の共学の全日制普通科高等学校2校に在籍する1~3年生476人とした。

調査対象を普通科高等学校に在籍する生徒とした理由は、高校生の73.6%という多くが普通科に在籍している<sup>21)</sup>ことから、本研究結果の一般化を考え、対象を普通科に在籍する高校生に設定した。

### 3.2.3 調査方法

調査は2021年8月~9月に実施した。調査内容は、性別と授業外(休憩時間、放課後等)の時間に担任との「会話で話したい話題(以後、会話内容)」と「一緒にしてみたい活動(以後、共有活動内容)」とした。「会話内容」、「共有活動内容」は自由記述で回答を求めた。回答方法はホームルームの時間に、筆者の作成した研究説明動画(倫理的な配慮や回答方法など)を視聴した後に、封筒に入った質問紙に記入、回収箱へ投函する方法をとった。

### 3.2.4 分析方法

分析は、内容分析<sup>22)</sup>の手法を参考に行った。具体的には、得られた記述の内容を熟読して不要な部分を削除し、記述をひとつの意味のある内容(コード)にした。なお、ひとつの文章に複数のコードが含まれている場合は、別々のコードとして扱った。「特になし(無い等も含む)」、「なんでもいい」、「極端な非日常的な会話内容や共有活動内容」、「意味内容が明確でない」、「極端に抽象度の高い内容」の記述は除外した。その後、それぞれのコードを内容的類似性に基づいてカテゴリ化し、そのカテゴリを項目とした。最後に高校生が理解可能であるかなどの各項目の表現について検討した。分析の内容的な妥当性を確保するために、上記の分析は質的研究に精通し、高校生精神保健分野の研究を多数実施している医療系専門職と大学教員の2名で実施した。

## 3.3 結果

調査回答者は452人であった(回収率78.5%)。このうち、必要な調査項目に欠損を有さない413人(男性:207人、女性:206人)を分析対象者とした(有効回答率91.4%)。

### 3.3.1 担任に求める日常的な「会話内容」と「共有活動内容」

担任に求める日常的な「会話内容」の記述は692コードであった。除外対象とした127コードを除いた565コードを分析した結果、18の項目が生成された。

担任に求める日常的な「共有活動内容」の記述は500コードであった。除外対象とした247コードを除いた253コードを分析した結果、8の項目が生成された。

4. 本調査

4.1 目的

本調査の目的は、予備調査にて作成された項目プールから高校生が担任に求める共通性の高い日常的な「会話内容」と「共有活動内容」の項目を選定することである。

4.2 方法

4.2.1 研究デザイン

本研究デザインは、横断的な自記式の質問紙を用いた量的記述的研究とした。

4.2.2 調査対象

調査対象は、予備調査対象高等学校を除く、A県内の共学の全日制普通科高等学校の全校の学校長宛てに調査協力依頼をした後、同意の得られた4校に在籍する1~3年生の1,212人とした。

調査対象を普通科高等学校に在籍する生徒とした理由は、予備調査と同様である。

4.2.3 調査方法

調査は2021年12月~2022年2月上旬に実施した。調査内容は、性別と予備調査で生成された担任に求める日常的な「会話内容」の18項目と日常的な「共有活動内容」の8項目とした。各項目に対する意志の程度は、「したい」、「少ししたい」、「あまりしたくない」、「したくない」の4件法で問うた。なお、質問紙は、各項目の意味理解を促すために内容例を提示する形式とした(表1, 2の内容例を参照)。回答方法は予備調査と同様の方法をとった。

4.2.4 分析方法

意志の程度のデータは、各項目に対して「したい」と「少ししたい」の選択者を【意志がある群】、「あ

表1 担任に求める日常的な「会話内容」の項目に対する回答分布および分析結果

単位:人(%)

ID	会話内容項目	内容例	意志がない (「あまり話をしたくない」, 「話をしたくない」)	意志がある (「話をしたい」, 「少し話をしたい」)	人数比較 P:有意確率
1	進路選択	大学(専門学校), 職業選択 など	108 ( 11.7 )	815 ( 88.3 )	$P < 0.001$
2	大学・職種	大学紹介, 職業紹介 など	121 ( 13.1 )	802 ( 86.9 )	$P < 0.001$
3	授業・学習内容	理解できなかった授業内容, テスト対策 など	158 ( 17.1 )	765 ( 82.9 )	$P < 0.001$
4	学習方法	学習効率, 勉強のやりかた など	175 ( 19.0 )	748 ( 81.0 )	$P < 0.001$
5	学力	自分の学力レベル など	189 ( 20.5 )	734 ( 79.5 )	$P < 0.001$
6	将来像	自分の将来や未来, 夢 など	241 ( 26.1 )	682 ( 73.9 )	$P < 0.001$
7	冗談事	面白い話, 楽しい話 など	289 ( 31.3 )	634 ( 68.7 )	$P < 0.001$
8	クラスのこと	クラスの雰囲気, 授業中の状況 など	327 ( 35.4 )	596 ( 64.6 )	$P < 0.001$
9	人生経験	人生経験の中で印象的な出来事, タメになった出来事 など	368 ( 39.9 )	555 ( 60.1 )	$P < 0.001$
10	部活動	部活動の成績, 内容 など	419 ( 45.4 )	504 ( 54.6 )	$P = 0.006$
11	趣味・嗜好	好きなゲーム, アニメ, 芸能人, スポーツ, 音楽 など	434 ( 47.0 )	489 ( 53.0 )	$P = 0.075$
12	社会での出来事	最近起きたニュース など	442 ( 47.9 )	481 ( 52.1 )	$P = 0.211$
13	身の回りの出来事	家であった出来事, 最近あった出来事 など	471 ( 51.0 )	452 ( 49.0 )	$P = 0.554$
14	悩み相談	自分の悩み など	505 ( 54.7 )	418 ( 45.3 )	$P = 0.005$
15	人生論	生きる意味, 人生とは など	508 ( 55.0 )	415 ( 45.0 )	$P = 0.002$
16	自慢話	自分がかんばったこと, 自信のあること など	539 ( 58.4 )	384 ( 41.6 )	$P < 0.001$
17	人間関係	友だち, 恋愛, 親子関係 など	548 ( 59.4 )	375 ( 40.6 )	$P < 0.001$
18	愚痴	日常的な不満 など	592 ( 64.1 )	331 ( 35.9 )	$P < 0.001$

意志がある人数が有意に多い会話内容を灰色塗りで示した

表2 担任に求める日常的な「共有活動内容」の項目に対する回答分布および分析結果

単位: 人(%)

ID	共有活動内容 項目	内容例	意志がない (「あまり一緒に したくない」, 「一緒にしたくない」)	意志がある (「一緒にしたい」, 「少し一緒にしたい」)	人数比較 P: 有意確率
1	進路調べ	自分に合う進路を本やネットで調べる など	263 ( 28.5 )	660 ( 71.5 )	$P < 0.001$
2	勉強会	テスト対策 など	298 ( 32.3 )	625 ( 67.7 )	$P < 0.001$
3	スポーツ	バスケットボール, バレーボール など	435 ( 47.1 )	488 ( 52.9 )	$P = 0.087$
4	課外活動	部活動, 生徒会活動 など	445 ( 48.2 )	478 ( 51.8 )	$P = 0.292$
5	ボランティア	地域のごみ拾いや草取り など	445 ( 48.2 )	478 ( 51.8 )	$P = 0.292$
6	レクリエーション	食事会, 遊び など	459 ( 49.7 )	464 ( 50.3 )	$P = 0.895$
7	掃除	学校内の掃除 など	462 ( 50.1 )	461 ( 49.9 )	$P = 1.000$
8	趣味	ゲーム, 手芸・工芸 など	483 ( 52.3 )	440 ( 47.7 )	$P = 0.167$

意志がある人数が有意に多い共有活動内容を灰色塗りで示した

まりしたくない」, 「したくない」の選択者を【意志がない群】として単純集計を実施した。さらに, 各群の人数を, 正確二項検定を用いて比較し, 有意水準は両側検定にて5%未満とし, 統計用ソフトはR version 4.2.1を採用した。

なお, 【意志のある群】の人数が有意に多い項目を高校生が担任に求める共通性の高い日常的な「会話内容」および「共有活動内容」とした。

#### 4.3 結果

同意を得られた回答者は940人であった(回収率77.6%)。このうち, 必要な調査項目に欠損を有さない923人(男性:540人, 女性:383人)を分析対象者とした(有効回答率98.2%)。

表1に担任に求める日常的な「会話内容」の項目に対する回答分布および分析結果を示した。「会話内容」で【意志がある群】の人数が有意に多かった項目は, 「進路選択」, 「大学・職種」, 「授業・学習内容」, 「学習方法」, 「学力」, 「将来像」, 「冗談事」, 「クラスのこと」, 「人生経験」, 「部活動」の10項目, 【意志がない群】の人数が有意に多かった項目は, 「悩み相談」, 「人生論」, 「自慢話」, 「人間関係」, 「愚痴」の5項目, 【意志がある群】と【意志がない群】の人数に有意な差がなかった項目は, 「趣味・嗜好」, 「社会での出来事」, 「身の回りの出来事」の3項目であった。

表2に担任に求める日常的な「共有活動内容」の項目に対する回答分布および分析結果を示した。日常的な「共有活動内容」で【意志がある群】の人数が有意に多かった項目は, 「進路調べ」, 「勉強会」

の2項目, 【意志がない群】の人数が有意に多かった項目は, 0項目, 【意志がある群】と【意志がない群】の人数に有意な差がなかった項目は, 「スポーツ」, 「課外活動」, 「ボランティア」, 「レクリエーション」, 「掃除」, 「趣味」の6項目であった。

#### 5. 考察

本研究によって, 高校生が担任に求める10の共通性の高い日常的な「会話内容」と2つの共通性の高い日常的な「共有活動内容」が明らかとなった。

まず, 高校生が担任に求める共通性の高い日常的な「会話内容」について考察する。本調査によって選定された高校生が担任に求める10の共通性の高い日常的な「会話内容」のうち, 「進路選択」, 「大学・職種」, 「授業・学習内容」, 「学習方法」, 「学力」の5つ(以降, 『学業関連会話』)は, 概ね8割という大多数の生徒が担任に求める「会話内容」として選択していた。これらの『学業関連会話』は, 自分の進路を見据えた学業に関連する問題の解決を主目的とする会話内容として捉えられる。我々は緒言において, 担任が高校生の精神的健康に貢献するために, ソーシャルサポートを提供する援助者として位置し, サポート期待を高めるかわりが求められる必要性を説いた。サポート期待の機能は, 情緒的サポートと道具的サポートの二種類に大別できると考えられている<sup>23)</sup>。情緒的サポートは, 勇気づける, 励ます, 共感するなどの傷ついた自尊心や情緒に働きかけるような援助である<sup>24)</sup>。一方, 道具的サポートは, ストレスを解決するために必要な資源を提供したり,

自身でその資源を手に入れることができるような情報を与えたりする援助であり<sup>24)</sup>、提供者が専門家である場合に有効であると考えられている<sup>25)</sup>。本調査で選定された『学業関連会話』は、道具的支持に含まれる内容であると捉えることができ、本研究結果は、大多数の高校生は、担任に対して学業に対する道具的支持を期待していると解釈できる。また、高校生の多くは、「自分の勉強や進路について」の不安やストレスを抱えていることが示されている<sup>26)</sup>ことを勘案すれば、高校生が担任という学習指導の専門家に対して、自身の大きなストレス源であり、解決すべき課題である学業関連の会話を求めていることは理解ができる。

『学業関連会話』と比較して選択率は低かったものの、「将来像」、「冗談事」、「クラスのこと」、「人生経験」、「部活動」の5つの「会話内容」も高校生が担任に求める共通性の高い日常的な「会話内容」として選定された（以降、『自己充足関連会話』）。これらの『自己充足関連会話』は、会話を楽しむことや自分の気持ちや考えを伝えるなど、会話すること自体を主目的とする会話内容と捉えられる。コミュニケーション自体が主目的であるコミュニケーションは、自己充足的コミュニケーションと呼ばれ、精神的健康に影響を与えることが明らかとなっている<sup>27)</sup>。また、自己充足的コミュニケーションは人と人との交わり<sup>28)</sup>や相互理解<sup>29)</sup>、関係性の維持<sup>30)</sup>に重要であると考えられている。すなわち、『自己充足関連会話』を媒介とした担任の生徒とのかかわりは、担任へのサポート期待の向上はもとより、生徒の精神的健康の向上や担任と生徒との良好な関係性の構築に対しても有効な手段になり得ると思料する。

次に、高校生が担任に求める共通性の高い日常的な「共有活動内容」について考察する。本調査によって、高校生が担任に求める共通性の高い日常的な「共有活動内容」として「進路調べ」、「勉強会」の2つが選定された。これらの「共有活動内容」は、前記の『学業関連会話』と同様に、学業に関連する問題

の解決に向けた道具的支持を期待する内容であると解釈できる。近年、新しいソーシャルサポートの種類として、コンパニオンシップという概念が注目されている<sup>31-33)</sup>。コンパニオンシップは、本質的な楽しみのために行われる余暇などの活動の共有であり<sup>31)</sup>、サポート期待や精神的健康の向上に寄与する要因として位置づけられている<sup>34)</sup>。予備調査で作成された高校生が担任に求める日常的な「共有活動内容」の項目プールの中には、「スポーツ」、「レクリエーション」、「趣味」などのコンパニオンシップに含まれると考えられるものがあつたものの、本調査においてそれらは選定されなかった。この結果は、高校生と担任の両者間において、コンパニオンシップが生じにくい関係性であることを示唆している。前述したように担任と生徒との良好な関係性の構築に対して『自己充足関連会話』を媒介としたかかわりが有効な手段となり得ることを鑑みれば、担任はまずそのような生徒とのかかわりを意識することが重要であろう。つまり、担任は『自己充足関連会話』を媒介とした生徒とのかかわりにて、生徒と良好な関係性を構築することにより、コンパニオンシップに含まれると考えられる「共有活動」についても生徒から求められる存在になると考える。

## 6. 結語：まとめと課題

本研究にて明らかとなった高校生が担任に求める日常的な「会話内容」や「共有活動内容」を媒介とした担任の生徒とのかかわりは、生徒の担任に対するサポート期待の向上に寄与する可能性があると思料する。しかしながら研究対象者は限定された集団であり、高校生の担任に対するサポート期待を規定する要因を見出せたとまでは言い切れない。そのため、今後は、母集団の属性分布に合わせた対象者の抽出により、高校生全般に対する妥当性の高い結果を得るための調査を実施し、資料を蓄積させることにより本研究で援用したRRTの実証的な検討を試みたいと考える。

## 倫理的配慮

予備調査、本調査ともに、川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：予備調査21-030、本調査21-087）。

調査は、対象高等学校の校長に承認を得た上で実施した。また、質問紙には研究目的、内容、手順、利益、不利益、匿名性について明記し、実施時には調査対象者に対して動画を用いてそれらについて説明した上で調査への協力を求めた。また、質問紙には同意のチェック欄を設け、同意が確認できたものを調査対象とした。質問紙とともに各個人の秘密厳守をするための個別の封筒を配布し、生徒自身によって厳封された質問紙の提出をもって研究参加の同意とした。

## 謝 辞

本研究にご協力くださったA県高等学校の校長先生、担任の先生方、回答してくださった高校生の皆さんに心より

感謝申し上げます。

なお、本研究に関連し、開示すべき COI (利益相反) に関する企業などはありません。

#### 注

- †1) 「期待されたサポート」とは、「知覚されたサポート」と同義語として用いられており、本研究の場合はこの翻訳語<sup>6)</sup>を採用することとした。

#### 文 献

- 1) Erikson EH : *Identity and the life cycle: Selected papers*. International Universities Press, New York, 1959.
- 2) 文部科学省：学校保健統計調査 / 令和3年度参考 (学校保健統計調査による身長発育値及び発育曲線)。 [https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00400002&tstat=000001011648&cycle=0&tclass1=000001172048&tclass2=000001172052&stat\\_infid=000032258916&tclass3val=0](https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00400002&tstat=000001011648&cycle=0&tclass1=000001172048&tclass2=000001172052&stat_infid=000032258916&tclass3val=0), 2022. (2023.3.7確認)
- 3) 文部科学省：学校基本調査 / 令和4年度 初等中等教育機関・専修学校・各種学校《報告書掲載集計》卒業後の状況調査 高等学校 全日制・定時制。 [https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00400001&tstat=000001011528&cycle=0&tclass1=000001172319&tclass2=000001172320&tclass3=000001172415&tclass4=000001172419&tclass5=000001172420&stat\\_infid=000032264966](https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00400001&tstat=000001011528&cycle=0&tclass1=000001172319&tclass2=000001172320&tclass3=000001172415&tclass4=000001172419&tclass5=000001172420&stat_infid=000032264966), 2022. (2023.2.16確認)
- 4) 文部科学省：令和3年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について。 [https://www.mext.go.jp/content/20221021-mxt\\_jidou02-100002753\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20221021-mxt_jidou02-100002753_1.pdf), 2022. (2023.3.12確認)
- 5) 浦光博, 南隆男, 稲葉昭英：ソーシャル・サポート研究—研究の新しい流れと将来の展望—。社会心理学研究, 4, 78-90, 1989.
- 6) シェルドン コーエン, ベンジャミン H ゴットリーブ, リン G アンダーウッド: 社会的関係と健康。 シェルドン コーエン, リン G アンダーウッド, ベンジャミン H ゴットリーブ編, ソーシャルサポートの測定と介入, 川島書店, 東京, 3-34, 2005.
- 7) Cohen S and Wills TA : Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357, 1985.
- 8) 井村亘, 渡邊真紀, 石田実知子：高校生の自傷行為に対する教師サポートと対人ストレスの関連。学校保健研究, 59, 347-353, 2017.
- 9) 南一也：高校生の学校適応感と抑うつ傾向との関連—教育現場における抑うつ傾向のリスクスクリーニングの可能性—。子どもの心とからだ, 27, 17-23, 2018.
- 10) 渡邊真紀, 石田実知子, 井村亘, 小池康弘：高校生の精神的健康に対する教師サポートと対人ストレスおよび怒りへの対処行動の関連。川崎医療福祉学会誌, 27, 441-447, 2018.
- 11) 井村亘, 石田実知子, 渡邊真紀：高校生の精神的健康に対する教師サポートとレジリエンスの関連。学校保健研究, 60, 114-119, 2018.
- 12) 尾見康博：子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワークに関する横断的研究。教育心理学研究, 47, 40-48, 1999.
- 13) 厚生労働省：今後の精神保健医療福祉のあり方等に関する検討会 (第16回) 早期支援について。 <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/04/d1/s0423-7d.pdf>, 2009. (2022.4.10確認)
- 14) Lakey B and Orehek E : Relational regulation theory: A new approach to explain the link between perceived social support and mental health. *Psychological Review*, 118, 482-495, 2011.
- 15) Tiina R, Tomi L, Asko T and Anne K : The role of social support in the association between gambling, poor health and health risk-taking. *Scandinavian Journal of Public Health*, 44, 593-598, 2016.
- 16) 森田裕子：高校生の教師に対する信頼感と教師からのソーシャルサポートに関する研究—教師と生徒の捉え方の違いについて—。学校心理学研究, 11, 15-28, 2011.
- 17) Fall AM and Roberts G : High school dropouts: Interactions between social context, self-perceptions, school engagement, and student dropout. *Journal of Adolescence*, 35, 787-798, 2012.
- 18) Gross J, Lakey B, Lucas JL, LaCross R, Plotkowski AR and Winegard B : Forecasting the student-professor matches that result in unusually effective teaching. *The British Journal of Educational Psychology*, 85, 19-32, 2014.

- 19) Woods WC, Lakey B and Sain T : The role of ordinary conversation and shared activity in the main effect between perceived support and affect. *European Journal of Social Psychology*, 46, 356-368, 2015.
- 20) Lakey B, Vander Molen RJ, Fles E and Andrews J : Ordinary social interaction and the main effect between perceived support and affect. *Journal of Personality*, 84, 671-684, 2015.
- 21) 文部科学省:高等学校学科別生徒数・学校数. [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/shinkou/genjyo/021201.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/shinkou/genjyo/021201.htm), 2022. (2023.4.26確認)
- 22) 有馬明恵:内容分析の方法. ナカニシヤ出版, 京都, 2007.
- 23) 橋本剛:ストレスと対人関係. ナカニシヤ出版, 京都, 2005.
- 24) 浦光博:支えあう人と人—ソーシャル・サポートの社会心理学—. サイエンス社, 東京, 1992.
- 25) Dakof A and Taylor SE : Victims' perceptions of social support: What is helpful from whom? *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 80-89, 1990.
- 26) 厚生労働省:平成26年度全国家庭児童調査結果の概要. <https://www.mhlw.go.jp/content/11920000/5zentai.pdf>, 2014. (2023.3.14確認)
- 27) Festinger L : Informal social communication. *Psychological Review*, 57, 271-282, 1950.
- 28) 加藤春恵子:広場のコミュニケーション. 勁草書房, 東京, 1986.
- 29) 船津衛:コミュニケーション・入門 改変版. 有斐閣, 東京, 2010.
- 30) 古谷嘉一郎:コミュニケーションが関係維持に及ぼす影響についての友人関係機能の仲介効果. 比治山大学現代文化学部紀要, 79-87, 17, 2011.
- 31) Rook KS : Social support versus companionship: Effects on life stress, loneliness, and evaluations by others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 1132-1147, 1987.
- 32) 細田絢, 田嶋誠一:中学生におけるソーシャルサポートと自他への肯定感に関する研究. 教育心理学研究, 57, 309-323, 2009.
- 33) 岸本直美, 藤桂:保育所における雑談が保育士のストレス反応に及ぼす影響. 心理学研究, 91, 12-22, 2020.
- 34) プライアン レイキー, シェルドン コーエン:ソーシャルサポートの理論と測定. シェルドン コーエン, リン G アンダーウッド, ベンジャミン H ゴットリーブ編, ソーシャルサポートの測定と介入, 川島書店, 東京, 37-69, 2005.

(2023年5月2日受理)

## Conversations and Shared Activities that High School Students Seek from Classroom Teachers

Wataru IMURA and Tomoko NAMBA

(Accepted May 2, 2023)

**Key words** : high school students, class teacher, conversation, shared activities

### Abstract

High school students are often still developing mentally and need perceived support from classroom teachers. The purpose of this study was to identify the contents of daily conversations and shared activities that high school students commonly seek from their classroom teachers. In this study, we asked the students about their degree of willingness to respond to 18 items of “conversation content” and 8 items of “shared activity content” generated in the preliminary survey. As a result, the 10 items of conversation content and the 2 items of shared activity content that had significantly higher levels of willingness were selected as items that high school students seek from their homeroom teachers.

Correspondence to : Wataru IMURA

Department of Occupational Therapy

Tamano Institute of Health and Human Services

1-1-20 Chikkou, Tamano, 706-0002, Japan

E-mail : [imura@tamasen.ac.jp](mailto:imura@tamasen.ac.jp)

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.33, No.1, 2023 81 – 88)